

資料

島崎藤村と身長について

青山 昌二

東京大学教養学部

On Toson Shimazaki and His Stature

Shoji Aoyama

Dept. of Sports Sciences, College of Arts and Sciences,
The University of Tokyo.

1. はじめに

島崎藤村(1872-1943)の作品を読んでいると、たとえば「千曲川のスケッチ」を開いてみても「K君は背の低い快活な調子の人で」とか「背の高い、勇健な体格を備えた」など、身長という言葉や体格という言葉に出くわす。何でもないことかもしれないが、身長や体格ということに関心を持ってこういった作品を読むと、そこには島崎藤村という作家の身長や体格への関心が窺われて興味深い。

そこで、あらためてここで身長ということに焦点をあてて、藤村が作品の中で身長についてどのように述べているか、そしていったい藤村自身の身長はどのくらいであったろうか、ということを探ってみたい。

以下において引用する藤村の作品の巻・ページは、

島崎藤村全集全31巻(筑摩書房、1956~57年出版)

によっている。

なお、いちいち記すということはないが、作品の発表された年や作品に登場する人物のモデル等は、

伊東一夫編「島崎藤村事典(改訂版)」(明治書院、1976年)

三好行雄編「島崎藤村全集別巻」の「島崎藤村年譜」(462~524ページ)(筑摩書房、1986年)によっている。

2. 1926年当時の女性の身長

最近に私の家では満州から帰って来た珍客を迎えた。……一家をあげての久しぶりの帰国だ。この親戚がはるばる満州あたりから帰って来て、幾年か見ない自分の国を見た時に、一番最初に目についたものは何かと言えば、そこいらの町で行き会う年若な娘たちの背だけのにわかに高くなったことであつたという。そう言われて見ると、ずっと以前から私たちの知っている婦人はいずれも背の低い人が多かった。おそらく、遠い旅からでも帰って来た人でなければ、そんなところへは気がつくまい。おもしろい観察だと思った。(第22巻50ページ)

これは、1930年に出版された藤村の第5感想集

「市井にありて」に収められている「身のまわりのこと」の中に出てくる一文である。この「身のまわりのこと」は1925年に書かれている。

ここには、何年ぶりかで帰国した「この親戚」(藤村の姪、藤村の次兄広助の長女ひさ、1890~1977)の「年若な娘たち」の身長が高くなったなあという感想と、それを聞き流さずに、「そう言われて見ると」その通りだ、「おもしろい観察だ」という藤村の感想とが軽妙に述べられ、藤村の身長への関心が窺われる。

これが書かれた1925年当時の平均身長の様子はどうかであつたろうか。図1は、文部資料¹⁾によって、18歳男女の身長について、全国平均値が出された最初の1900年から90年間の平均値(移動平均)の推移を10年ごとにプロットしたものである。

これを見ると、女子の身長は1900年の147cmから1989年の158cmへと、90年間で約11cmの伸びを示している。そして、1900年からはじめの頃は10年に約1.5cmの伸びをみせ、この「身のまわりのこと」が書かれた1925年当時には150cmから151cmにかかろうとしている時である。この図は18歳の場合である。今では発育の加速化現象から、18歳の身長と20歳の身長とはほとんど同じであるが、この当時は男女とも18歳から20歳へ約1cmの伸びを示しており、この年の20歳の平均値は151.5cm、つまり昔の言い方ではおよそ5尺に達した時である。藤村は1872年生まれであるので、1900年にはすでに28歳になっている。この全国データにみる身長の推移傾向からいって、藤村のもっと若い、20歳の頃あるいは、「ずっと以前」の婦人たちの平均身長は147cmより1cmないしは2cm近く低かったということが推測される。したがって、「ずっと以前」は1925年当時より5cmあるいはそれ以上低かったと推測される。藤村の「そう言われてみると」という感想がなるほど頷けて、身長発育についてながめる上でこの「身のまわりのこと」はひとつの貴重なデータであるといえる。

3. 子どもたちの身長

作品「嵐」が書かれたのは1926年で、藤村の54歳の時である。この作品は、藤村と藤村の4人の子どもたちがモデルになっていると言われている。この「嵐」の出だしは、子どもたちの身長のこと

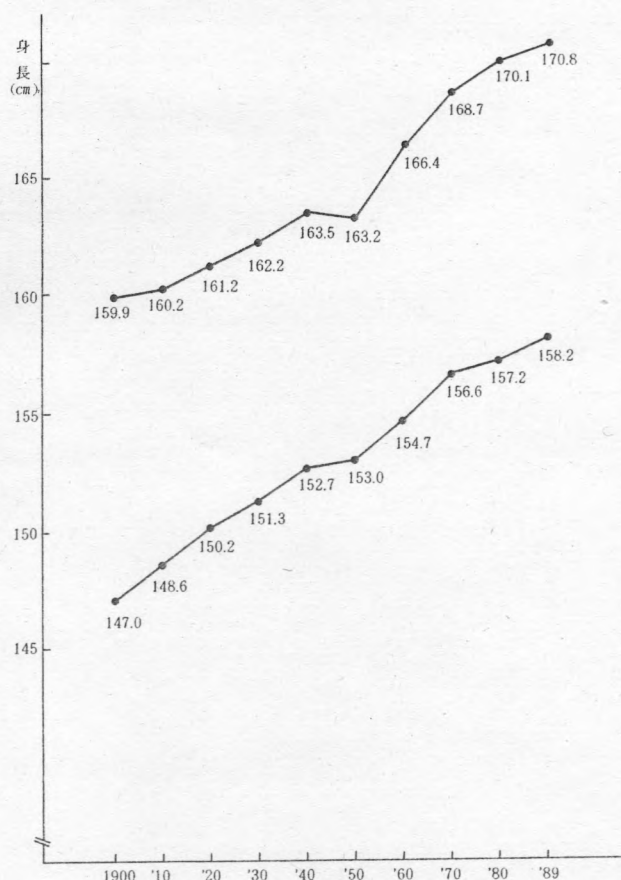


図1 18歳の身成平均値にみる1900年から90年間の推移

で始まっている。

子供らは古い時計のかかった茶の間に集まって、そこにある柱のそばへ各自の背丈を比べに行った。次郎の背の高くなったのにも驚く。家じゅうで一番高い。あの子の頭はもう一寸四分ぐらいで鴨居にまで届きそうに見える。毎年の暮に、郷里のほうから年取りに上京して、その時だけ私たちといっしょになる太郎よりも、次郎のほうが背はずっと高くなった。(第21巻33ページ)

次郎のモデルは、藤村の次男鶏二(1907~1944)であり、この時は川端画学校に在学中である。次郎の頭が「もう一寸四分ぐらいで鴨居にまで届きそうに見える」ということは、鴨居の高さも一樣ではないがその高さを昔で言う5尺7寸(171cm)とすると、一寸四分(4.2cm)を引いて、次郎の身長は166~7cmというところであろうか。

太郎のモデルは藤村の長男楠男(1905~1981)である。かれは、藤村の卒業した明治学院で学んでいたが、この作品「嵐」の書かれる4年ほど前

の、1922年(楠男16歳)に中退して藤村の郷里である木曾馬籠に帰農しており、毎年末に年取りに上京していた。

続いて「嵐」の文章は背くらべの場面となる。

茶の間の柱のそばは狭い廊下づたいに、玄関や台所への通り口になっていて、そこへ身長を計りに行くものは一人ずつその柱を背にして立たせられた。そんなに背のびしてはズルいと言ひ出すものがあり、もっと頭を平らにしてなどと言うものがある、家じゅうの者がみんなで大騒ぎしながら、だれが何分のびたというしるしを鉛筆で柱の上にしるしつけておいた。だれの戯れから始まったともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ一つには頭文字だけをローマ字であらわしておくような、そんないたずらもしてある。「だれだい、この線は。」と聞いてみると、末子があり、下女のお徳のがある。いつぞや遠く満州の果から家をあげて帰国した親戚の女の子の背丈までもそこに残っている。私の娘も大きくなった。末子の背は太郎と二寸ほどこし合わない。その末子がもう九文の足袋をはいた。(第21巻33ページ)

ここには、柱を背にして身長の「測りっこ」をしている光景が、実に生き生きと描かれている。柱にしるしをつけるといえば、この「嵐」が書かれる少し前の1919年に「柱のきずはおとしの五月五日の背くらべ」で始まる「背くらべ」(海野厚作詩、中山晋平作曲)の歌が作られている。この歌は文部省唱歌ではなかったものの、広く愛唱され、藤村の家でも恐らく耳にしていたものと思われる²⁾。

この文中の末子のモデルは藤村の四女柳子(1910~)である。「末子がもう九文の足袋をはいた」とある。九文は今で言えば21.5cmの大きさであることから、ごく大雑把に身長を推定すれば150~153cmというところであろうか。そうすると、兄の太郎の身長は「二寸ほど」の違いであるので156~159cmということになる。

また、さきの「身のまわりのこと」にあった、藤村の姪である「この親戚」も登場していて、いっそう賑やかな雰囲気が出されている。

「嵐」の出だしの身長に関する叙述は、縦1行24

字の40行に及ぶ詳しいものである。上に引用した文章にすぐ次のように続いている。

四人ある私の子供の中で、身長が発育にかけては三郎が一番おくれた。ひとところの三郎は妹の末子よりも低かった。日ごろ、次郎びいきの下女は、何かにつけて「次郎ちゃん、次郎ちゃん」で、そんな背の低いことでも三郎をからかうと、そのたびに三郎はくやしがつて、「悲観しちまうなあ——背はもうあきらめた。」とよく嘆息した。その三郎がめきめきとのびてきた時は、いつのまにか妹を追い越してしまったばかりでなく、兄の太郎よりも高くなった。三郎はうれしさのあまり、手を振って茶の間の柱のそばを歩き回ったくらいだ。

そういう私が同じ場所に立ってみると、ほとんど太郎と同じほどの高さだ。

三郎のモデルは藤村の三男蓊助(1908～)である。蓊助も明治学院を一年でやめて、この時は次男鶏二と同じく川端画学校に在学中であった。

一般的にみて、身長が発育における伸長期(いわゆるスパートの時期)は、男子より女子の方が2年ぐらい早い。この時期は、今では身長発育の加速化現象から男女ともにそれぞれ昔に比べて低年齢化してきているが、男子より女子のほうが2年ぐらい早いということには変わりがない。

この「嵐」では、末子のほうが2歳年長の三郎よりも早く身長のスパートが始まり、三郎を追い抜く。ところが、今度は三郎の身長のスパートが始まり、「めきめきと」伸びて末子を抜き返し、更に上の兄の太郎をも追い越してしまう。ここには、青年期に入っていく子どもたちの身長発育の様子が藤村の目を通して精確に描き出されている。自分の子どもであるからとはいっても、これだけの観察を持っているということには、やはり藤村の身長への関心が窺われる。

そして、「そういう私が同じ場所に立ってみると、ほとんど太郎と同じほどの高さだ。」と、主人公の藤村自身が背くらべの仲間入りをしている。上で、末子の足袋の大きさを通して太郎の身長を大雑把に推測してみたが、してみると「私」である藤村自身の身長も156～159cmというところであろうか。

しかし、この推測は、

末子…九文の足袋 →150～153cm

太郎…末子より二寸ほど高い→156～159cm

藤村…太郎とほとんど同じ →156～159cm

というプロセスを経たものであり、大づかみに過ぎよう。

4. 身長の伸長期

末子の身長のスパート、三郎の身長のスパートについては今触れたが、もう一度触れる。

末子のモデル柳子の身長について、藤村が木曾に帰農していた長男楠男氏に宛てた1923年4月15日付の葉書の中に

当地一同無事、柳ちゃんなどは此節は蓊ちゃんより高いくらいに延びました。——四月十五日の日曜。(第31巻147ページ)

とあり、「嵐」の叙述と符合している。柳子は、1910年8月生まれであるので、1923年という時はちょうど実践女学校に入学した年、すなわち現制度でいえば中学1年生の年の4月に当たり、12歳である。

この時期に柳子は身長の伸長期を迎えていたとみられるが、この伸長期は当時としては、図2から看取されるように、普通であるとみてよいであろう。また、今でいえば中学3年生(14歳)となった蓊助(三郎)はまだ伸長期に入っていないことがわかる。

作品「子に送る手紙」の中でも、兄弟の身長について触れられている。この「子に送る手紙」は、1924年に書かれたもので、木曾に帰農していた長男楠男宛の通信という形式をとっている。その中にこういうところがある。

お前の弟たちやお前の妹たちが大きくなったことは、お前をも驚かしたろうか。次郎などはわたしより背が高いくらいだ。三郎は九文の足袋をはくようになり、一昨年あたりまでは四つ身の着物で間に合った末子が本裁ちでなければ着られないというほど背が延びた。ひどいものではないか。(第22巻140ページ)

小学館の国語大辞典を引くと、「四つ身」(よつみ)というのは「和服の裁ち方の一種」で「五、六歳から十二、三歳までの子どもの衣服に用いる」とあり、「本裁ち」(ほんだち)というのは「並幅の

一反の布で、おとな用の着物を仕立てること、またその裁ち方」とある。つまり、平たく言えば、子ども用の着物では間に合わなくなり大人用の着物を着るようになった、ということであろう。末子の身長がぐんと大きくなっていく様子が着る着物を通して語られている。

また、「嵐」に次いで出された作品「分配」(1927年)の中にも

末子のはかさんの残した³⁾古い鏡台の前あたりに立って、黒いのはかまのひもを結んだが、それが背丈の延びた彼女に似合って見えた。

(第21巻 126 ページ)

と、末子の「背丈の延びた」ことがここでも衣服を通して語られている。

藤村の第4感想集「春を待ちつつ」にある「旧い学窓のこと」の中でも、自分の子どもたちについてこういう場面がある。

ある日も、私は用たしのついでに、子供らといっしょに冬の日比谷公園を歩いた。めずらしいよい天気だった。……あの日の散歩は

何がなし楽しかった。いっしょに歩いている子供らの背が自分と同じくらいか、どうかすると自分より高いのを見るについても、自分の学生時代のことを思い出した。(第18巻 204 ページ)

「旧い学窓のこと」は1925年1月に藤村の母校明治学院の「白金の丘第54号」に載っているの、この「冬の日比谷公園を歩いた」のは1924年の12月頃であったであろう。「子供ら」というのは、長くなるのでここには引用しなかったが前後の文章から推察して、次男鶏二と三男蓼助の二人である。この時、鶏二は16歳3ヶ月、蓼助は15歳0ヶ月である(表1)。

この「子供ら」の身長が「自分と同じくらいか、どうかすると自分より高い」とあるところからすると、この年の4月には妹にひけをとるぐらいに低かった三男蓼助の身長が、このあとスパートが始まって12月には父親の藤村と並ぶほどまでにぐんぐん伸びた、というように読みとられる。したがって、蓼助の身長の伸長期は14歳後半であると

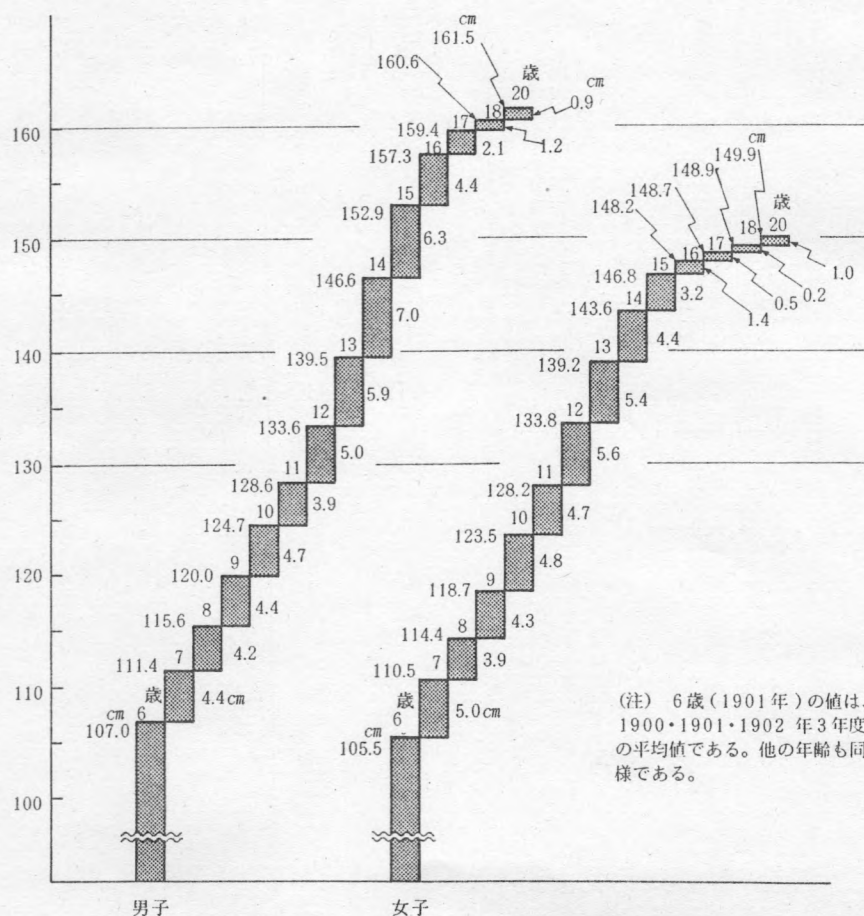
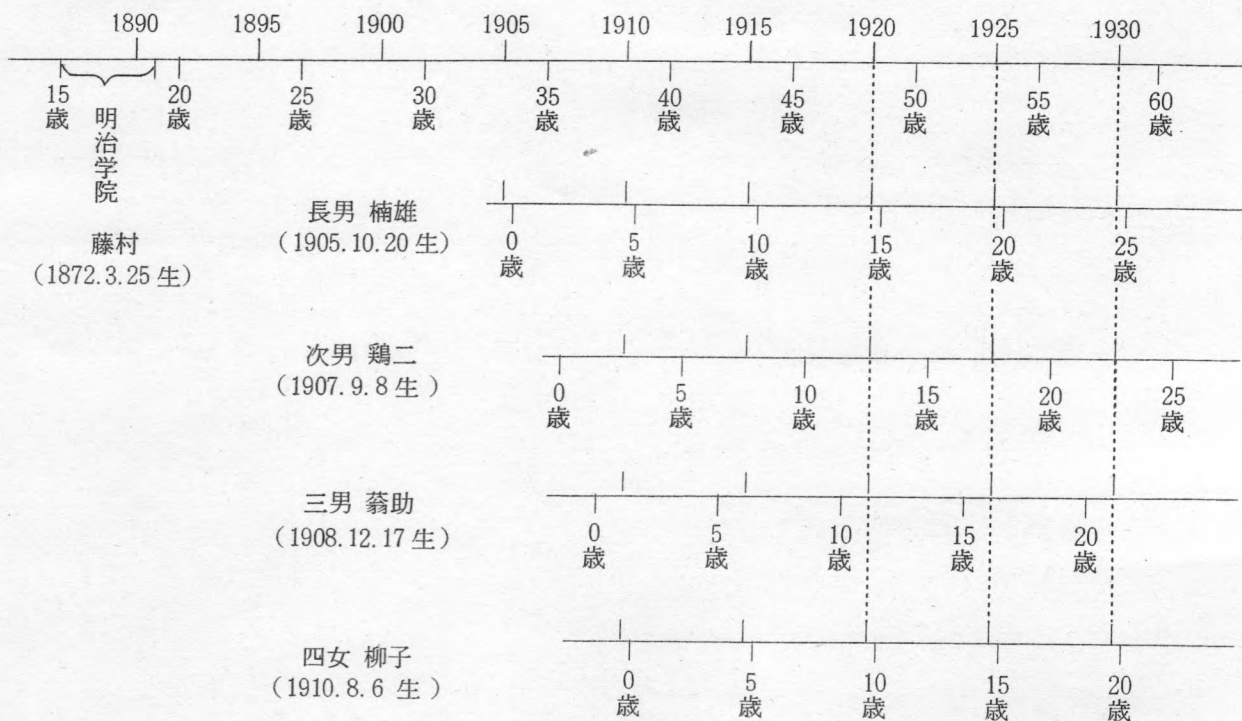


図2 6～20歳(1901～1914年)の身長発育

(注) 6歳(1901年)の値は、1900・1901・1902年3年度の平均値である。他の年齢も同様である。

表1 藤村及び藤村の子どもたちの年齢比較



みられる。

さきに引用した「嵐」の背くらべのところと組み合わせてみると、「嵐」の3番目に引いた文章の終わりに近いところの「……兄の太郎よりも高くなった。」と「三郎はうれしさのあまり……」との間に、「三郎の背はこの半年で二寸も延びた。」という一文が、挿入できそうである。

5. 藤村の身長発育の伸長期

それでは、藤村自身の身長発育の伸長期はいつ頃であったであろうか。これを藤村の作品に求めてみる。次のようなところがある。

十八という年は種夫には六月の末までで学校の二学年を終わって、夏休み後から三年級に移ろうとする時であったが、際立って背の延びたことが人の目についた。前の年あたりから種夫のからだは急にひといきに延びて来たといってもよかった。まるで春先の竹の子でも見るように。日に焼けた面を岡田の家へ出すと、隠居や細君はまずそれを言った。

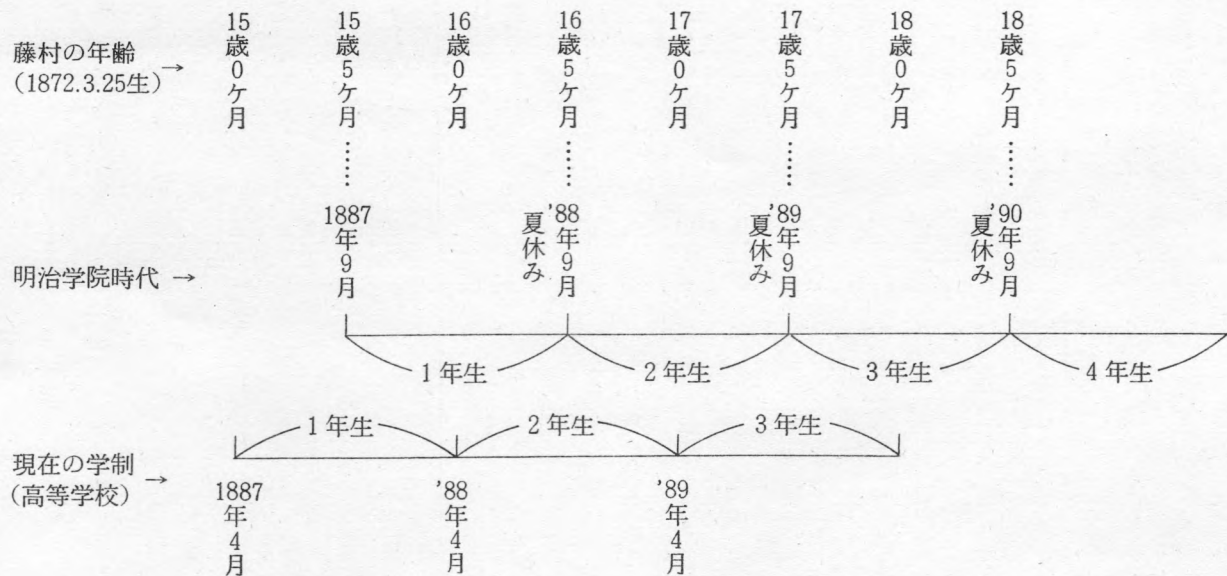
(第12巻 225 ページ)

これは、1913年1月、藤村の40歳の時に書いた作品「桜の実」(一)の中にある。当時の学年始めは9月であり、藤村は1887年9月に明治学院普通学

部本科に入学しているので、表2にみるように、「二学年を終わって」の夏休みには17歳3ヶ月である。引用文の「種夫」の「十八という年」は、この当時は数え年であったので、藤村の年齢と一致している。この時に「際立って背が延びたことが人の目につ」き、「前の年あたりから種夫のからだは急にひといきに延びて来たと言ってもよかった」とあることから、今の学制でいえば高校2年生の後半から3年生にかけての時期が種夫の身長発育の伸長期であったとみてよい。この「桜の実」の種夫、そしてこのあとに述べる、稿を改めた「桜の実の熟する時」の主人公岸本捨吉は、藤村自身が「自分らの早い青年期を胸に浮かべながら書いたもの」⁴⁾と述べているように、ほとんどの叙述が藤村に関する事実と相応しており⁵⁾、したがって、ここでも種夫の身長伸長期イコール藤村自身の身長伸長期とみてよいであろう。そうすると、藤村の身長伸長期は16歳の後半から17歳にかけての時期ということになる。これは、図2から看取されるように、当時としても遅いほう、すなわち奥手の部類に属している。

ここに出てくる「岡田の家」というのは、藤村が自分の家同様に少年の頃から身を寄せていた、「自分のために心配し、自分を待ち受けていてくれ

表2 明治学院生徒時代の藤村の年齢と現在の学制



る恩人」(第12巻18ページ)の家のことであり、藤村は明治学院入学当初はこの「岡田の家」から「およそ二里」(8km)の道程を歩いて通学していたが、いかにも遠すぎるということから、明治学院の敷地内にあった寄宿舎に入っていた。夏休みになり、藤村が久しぶりにこの家に帰って行った時に、藤村が「おばあさん」と呼んでいた「隠居」や「ねえさん」と呼んでいた「細君」から、思わず、「背が高くなったなあ」と言われ、それを藤村は覚えていたものであろう。

ところで、上に引用した内容と関連する内容がもう一ヶ所に出てくる。藤村は、「桜の実」(一)を1913年1月に、(二)を続いて2月に雑誌「文章世界」に出したあと、4月にはフランスに出発し、帰国するのは3年後の1916年7月であるが、その間のフランス滞在中に「桜の実」の稿をまた最初から書き直し(「桜の実」(一)(二)は廃棄されて⁶⁾)、新たに「桜の実の熟する時」の題名のもとにその(一)を1914年4月に、(二)を同年8月にというように「文章世界」に載せていった。その(二)に次のようにある。

彼は自分自身のにわかな成長を、急に高くなった身長(せい)を、急に発達した手足を、自分の身に強く感ずるばかりでなく、恩人の家のほうで、もしくはそのまわりで、自分と同じようにそろって大きくなって行く若い人

たちのあることを感じた。(第12巻19ページ)

「彼」はこの作品の主人公岸本捨吉であり、「桜の実」の種夫であり、藤村である。ここにも「急に高くなった身長」という言葉が出てくる。これはいつなのか。この時期が「桜の実」でみた時期と同じであろうか。ところが、何の気なしに読むとそうではないのである。この検討に入らなければならない。

上述したように、今引用した箇所は「桜の実の熟する時」の(二)の中にあるが、その(一)の終りのほうに「第三学年も終わりに近いころであった」とあり、そのあとに2ページほどにわたって、「入学して二年ばかりの間」の明るい気持を今のうっ屈した気持に対比させながら回想して書き、そして(二)に入る。(二)は「暑中休暇が来てみると」で始まっている。このあとの「夏期学校」に出席するにいたるまでの叙述からしても、この「暑中休暇」は3年生末の夏休みのことである。

3年生末の夏休みが来て、「自分を待ち受けていてくれる恩人の家族」のところへ帰って行く。その帰って行く道みちが具体的に叙述される。「その日は伊皿子坂の下で乗合馬車を待つつもりで、昼飯を済ますとすぐ寄宿舎を出かけた。」とあり、20行ばかりおいて、段落がかわって、「新橋で乗り換えた乗合馬車は日本橋小伝馬町まで捨吉を乗せて行った。」と続いて行く。まだ「恩人の家」に帰

って行く途中である。

ここに何故こだわるかといえば、実は、上に引用した「彼は自分自身のにわかな成長を」の文章が、今「20行ばかりおいて」と書いたこの20行ばかりの中に置かれているからである。ただ読んでいくと、捨吉の「急に高くなった身長」は3年生のように読める。しかし、これでは「桜の実」と比べて1年遅いし、年齢的にも遅いということを念頭におきながら注意して読み返してみると、ここは、この時に「恩人の家」の人から言われたのではなく、まだ帰って行く途中であり、「なんとなく楽しい道を帰って行くような心持になっ」て、自分の身長や手足の大きくなったことや帰って行く「恩人の家」やその周囲の若い人たちの成長していく様子に「想像で見ることができた。」と述べているのである。したがって、ここから、捨吉すなわち藤村の身長伸長期を当時の学制でいう2年生の後半から3年生にかけて（17歳後半から18歳にかけて）であると必ずしも決めつけなくてもよいのではないか。やはり、藤村の伸長期は、さきの「桜の実」にあった、16歳後半から17歳にかけてであるとみたほうがよいであろう。

それでは、藤村は何故ここで身長のことに触れたのであろうか。藤村は、この夏休みに「恩人の家」で「おじさん」に遠慮しながらも、「夏期学校」に出たいという気持を伝え、許可をもらう。この、日本基督教青年会主催の第2回夏期学校は3週間にわたって開かれ、藤村は熱心に受講した。これを通して、3年生になってから「沈黙しうっ屈した胸の苦痛」は、「夕陽の美」に見とれる、「言いあらわしがたい喜び」にかかわって行く。

この、暗い気持から明るい楽しい気持へと出て行く過程で、すでに明るい楽しい気持のほうから、暑中休暇で家に帰って行く段階をも見通して、「なんとなく楽しい道を帰って行くような心持になった。何かこう遠い先のほうで自分らを待ち受けていてくれるものがある。」とあり、続けて、問題の自分やこれから帰って行く家やそのまわりの人たちの成長の著しいことが出てくる。からだの成長の著しいということを通して、心の成長も著しいということが効果的に迫ってき、ずっとあとの「夕陽の美」への気持につながっていく。こういうことから、藤村はここに「急に高くなった身長」を

おいたのではあるまいか。

6. 藤村の自分の身長に対する評価

これまでみてきたように、藤村はいろいろな作品の中で身長について述べているが、藤村は自分の身長についてどのように思っていたであろうか、いわば自己評価していたのであろうか。

さきにも書いたように、藤村は1913年4月にフランスに出発し、1916年7月に帰国するが、このフランス滞在中のことを中心に書いたものに、「平和のパリ」（1915年）、「戦争とパリ」（1915年）、「海へ」（1918年）、「エトランゼー」（1922年）などの作品があり、この中に身長のことにも触れているところがある。

藤村は、フランス滞在中の2年目の7月に第一次世界大戦にぶつかり、「戦争とパリ」によると、「パリの在留のエトランゼーはみんな警察署へ出頭せよ」とのことで、警察署（分署）へ出向いた。行ってみると、そこには「数百人のエトランゼーが密集して横町の片側に列を造っ」ていて、なかなか進まない。こうある。

あとからあとから押して来る人たちの中には恐ろしく高い背と臂の力を利用してみんなの間へ割り込もうとする女すらありました。私は背は低いほうですし……（第13巻131ページ）

そして、「ようやく三日がかりで」フランス人の書記の前までたどりつく、

書記は事務所風の机の上に私どもの旅行券を広げながら、じろじろと私どものほうをながめて二人の簡単な人相書きをも書いてくれました。……H. Shimazaki 身の丈低し。髪黒。鼻に癖あり。（第13巻138ページ）

この2箇所ともほとんど同じ文章が「エトランゼー」にも出てくる。これをみると、藤村は、自分の身長を「低いほう」だと思っているし、フランスの書記官も藤村の身長を「低い」と評価していることがわかる。

また、作品「海へ」の中で、「地中海の旅（父を追想して書いた手紙）」の章に、「父上」に向かって次のように言っている。

母上御存命中はよくあなたの足袋の大きかったおうわさが出ました。父上は図なしをは

かれたほどの人だと申されたことでしたがそのあなたの子に似合わず、私は背は低いほうでございます。国を出る時にそれを気にしてくれた人もありまして、知らない土地へ行って恥をかいに来てくれるななどと申されたものでございます。私は見上げるような恐ろしい体格をもった人たちがばかりの中へでも行くことかと想像して船旅に上りましたところ、多くのフランス人というものが思ったよりも背の高くないのは意外でした。(第14巻60ページ)

ここには、藤村の父親(1831~1886年)の背が高かったこと⁷⁾、そしてそれにひきかえて自分は「背は低いほう」であること、背の低いことから「知らない土地へ行って恥をかいに来てくれるな」と言われたことが述べられている。さらに、フランス人は「思ったよりも背が高くない」という藤村の評価も述べられている。

「知らない土地へ行って恥をかいに来てくれるな」と言われたということは、「エトランゼー」の中にも出てくる。

私たちは自分らの背のことを言い出すほどに書生の昔に帰ったような気で話し合うようになった。私も国を出る時に、「もう少しお前に背をくれたい、知らない土地へ行って恥をかいに来てくれるな」と言われてきたほど背が低い。その私に比べたら、河上君はヨーロッパ人の中に混じっても敗(ひ)けをとらないほど高く見えた。(第17巻91ページ)

これを読むと、藤村は自分の身長を「低いほう」よりも、もっと強く「低い」と意識しているようである。

この文中にある「河上君」については、「海へ」の中で、といっても帰国して京都でのことであるが、ここでも書かれていて、

背の高いK(H)君が立てば頭のつかえるほどな鴨居の外は深いひさしになっていて…

… (第14巻178ページ)

とある。「K(H)君」は「河上君」であり、河上肇のことである。ヨーロッパ人に「敗けをとらない」河上肇の身長は、鴨居に「頭がつかえるほど」とあるところからすると、さきに鴨居の高さを5尺7寸(171.5cm)としたが、鴨居の高さは一様で

はないし、この場所は料亭であるのでもっと高かったと思われる。したがって、優に170cmは越えていたであろうと考えられる。ヨーロッパ人の中に入っても「敗けをとらない」と藤村が見ていることから、河上肇の身長に関心を持って、さきごろ河上肇の研究者である杉原四郎氏に問い合わせたところ、「170cm乃至それより少し多い(175cmまで)」ということであった⁸⁾。この値は、この当時の日本人の平均身長に比べて、10cm程度高い。身長の標準偏差から統計的に推測してみても、これは高いほうから5%以内に入るであろう。したがって、藤村の「高い」という評価が十分に頷かれる。

上の文中にある、「もう少しお前に背をくれたい」という表現は、藤村の記憶に強くあったらしく、「夜明け前」第1部(1932年)で別な人に当てられている。そこにはこうある。

隠居は家の人たちといっしょに門口に出て、寿平次を見送る時に言った。「お前にはもうすこし背をくれたいなあ。」この言葉が寿平次を苦笑させた。隠居は背が高い半蔵に寿平次を見比べて、江戸へ行って恥をかいに来てくれるなというふうになんて言ったからで。

(第23巻91ページ)

半蔵のモデルは藤村の父であり、寿平次のモデルは藤村の伯父(母の兄)である。ここには父の背の高かったこと、それにひきかえ伯父の背の低かったことが書かれている。また、「恥をかいに来てくれるな」も使われていて、ここではフランスではなく江戸になっている。

なお、ついでにもう少し藤村のまわりの人たちの身長に触れてみたい。今見た伯父については、同じ「夜明け前」の中に、

彼は背の低い男で、肩の幅で着ていた。

(第23巻79ページ)

背こそ低いが、彼ももはや三十歳のさかりだ。(第23巻190ページ)

とがある。

藤村の父親の身長が高いことについては上でも触れてきたが、ほかにもある。「夜明け前」の中に、

なにしろ背は高く、足袋は図無しと言われるほど大きなものをはき、腕の力とても相応にある半蔵のような人を……(第26巻253ページ)

とある。作品「家」(1910年)の中にも、
父の忠寛は体格の大きな、足袋も図なしを
はいたほどの人で(第9巻28ページ)

とある。

藤村の長兄(1858~1924年)については、「家」
の中に、

彼は兄弟じゅうで一番背の高い人で、体格
の強壮なことは父の忠寛に似ていた。小泉の
家に伝わって、遠い祖先の欲望を見せるよう
な、特色のある大きな鼻の形は、彼のおもば
せにもよく表れていた。(第9巻39ページ)
とあって、長兄の背が高いこと、藤村の「鼻に癖
あり」とフランス人の書記に書き込まれたのと同
じかどうか分からないが、長兄の鼻に特長のある
ことが書かれている。

藤村の次兄(1861~1928年)については、これ
も同じ「家」の中に「森彦」で登場し、

強い、充実した、ふとったからだに羽織は
かまを着け、紳士風の帽子をかぶった人が、
門の前に立った。この人が森彦だ。(第10巻
15ページ)

とあるが、身長には触れられていない。森彦につ
いて「ふとったからだ」という言いかたは「家」
のほかのページにもみられる(第9巻130ページ)。

藤村の姉の娘である姪(田鶴, 1873~1933)に
ついて、作品「ある女の生涯」(1921年)の中に、
お新は面長な顔かたちから背の高いところ
まで父親似で、長いまゆのあたりなぞも父親
にそっくりであった。(第20巻72ページ)

と、「お新」で語られている。「父親」はしたが
って姉の夫であり、「姉の夫というは背の高いり
っぱな威厳のある人で」(作品「生い立ちの記」、
第12巻192ページ)と、背の高いことが出ている。

また、藤村の家に入出入りしていた、次兄の次女
である姪(こま子, 1893~1979年)についても、
作品「新生」(1918年)の中の「節子」で、

ゴツゴツした、背の高い節子から(第16巻
219ページ)

と、背が高いとある。

このようにみえてくると、藤村の身近な人たちに
は背の高い人が多い。もちろん、作品の中では身
長のことには触れられていない身近な人たちも多
くいるわけであるが、それにしても、父親の背が高

かったこと、長兄も背が高かったことは藤村の意
識に相当強くあったであろう。

7. 藤村の身長

以上述べてきたことから、藤村は自分の背が低
いという意識を相当強く持っていたとみられる。
藤村の子どもたちの身長について述べたところで、
藤村の身長を長男太郎と同じぐらいということか
ら、藤村の身長は156~159cmであろうと大雑把
に言及してみた。

藤村の身長はじっさいにはどのぐらいであった
であろうか。このために、原一平氏の次男晨也氏、
赤田開太氏の孫健一氏、藤村の長男島崎楠雄氏及
び三男島崎翦助氏、による藤村の身長について以
下に述べてみたい。

(1) 原一平氏の次男晨也氏から

原一平氏(1897~1955年)は、藤村の郷里木曾
馬籠の人で、後年村長等の要職にあった人である。
藤村はこの原一平氏に対して、氏の青年時代から
すでに厚い信頼を寄せていた。藤村は長男楠雄氏
の木曾への帰農については原一平氏宅にあずけて
農業を学ばせるなど、また山林や田畑の購入、楠
雄の家の新築にいたるまで全面的に氏に委ねた。し
たがって、藤村と氏の家とは極めて親しい間柄にあ
った。全集(1956~57年)第31巻書簡篇の中に、
藤村から原一平氏宛に出した書簡が36通掲載され
ており、まだ青年であった氏にいかに信頼をお
いていたかがよく滲み出ている。

筆者は、この原一平氏宅は今は「清水屋資料館」
として次男晨也氏が跡を取っており、母堂(一平
氏の妻)が健在であると聞いた⁹⁾ので、1979年10
月16日に清水屋資料館を訪れて、藤村の身長のこと
をたずねてみた。晨也氏と母堂とで話し合った
結果は、

5尺2寸の父(一平氏)よりも少し高めであ
ったと思う

とのことであった。5尺2寸は157.5cmであるの
で、藤村の身長がこれより「少し高め」というこ
とになると、158~9cmというところであろうか。

(2) 赤田開太氏の孫健一氏から

藤村の写っている写真から藤村の身長を推定で

きないか。つまり、藤村と並んで写っている人の身長がわかればそれから藤村の身長をも推定できるのではないか。

ところが、推定に足る写真はなかなか見当らない。並んでいる写真があるかと思うと、藤村が足をゆるめていたり、足元の方が影になっていたり、ようやくみつかったのは、明治学院の同級生大勢といっしょに卒業の頃に撮った写真であった¹⁰⁾。その中で、藤村は赤田開太氏と並んで立っていて、拡大してよく見ても二人の身長は全く同じといってよかった。赤田開太氏の身長は何cmであったであろうか。

赤田開太氏は群馬県の人である。連絡をとって、身長のことをたずねてみた¹¹⁾。氏の孫の健一氏と母堂¹²⁾とで相談した結果、

祖父(開太氏)は小柄なほうで、5尺2寸程度であった

とのことであった。赤田開太氏が5尺2寸とすれば、藤村も5尺2寸で、157.5cmである。

(3) 藤村の長男島崎楠雄氏及び三男蓊助氏から思いきって、木曾馬籠に、藤村記念館顧問であり旅館「四方木屋」(よもぎや)を経営していた藤村の長男楠雄氏を訪れたのは、1980年8月19日であった。楠雄氏はこの時74歳であった。

父の方がここ(両手で両肩を指さしながら)は私より広かったが、背は同じだった。5尺2寸5分である。

これが楠雄氏の回答であった。5尺2寸5分といえは159cmである。

藤村の次男鶏二氏は太平洋戦争で戦死したが、三男の蓊助氏は画家で東京都杉並区に健在であることがわかったので、氏に藤村の身長をたずねた。1981年7月10日である。電話の上であるが、

父の身長は5尺2寸である

とのことであった。そこで、長男楠雄氏から聞いた5尺2寸5分ということを口にしたところ、そぐずに、

それは、兄貴は記憶違いをしている。5尺2寸である。

とのことであった。5尺2寸といえは157.5cmである。

長男と三男とでは父親の身長について5分(1.5

cm)のくい違いがある。二人のうちのどちらかに記憶違いがあって、どちらかが正しいのであろうか。しかし、二人からそれぞれ自信をもった言い方で言われてみると、どうもそういうわけにもいかない。この両方の値がともに記憶違いでないとすれば、考えられることのひとつは身長の生涯変動である。すなわち、一般的にいて、身長は50歳を過ぎる頃から低くなり始める。個人差も大きい、70歳では最高時の身長に比べて2cmから人によっては5cm以上も低下する¹³⁾。二人がそれぞれ父親のそばにいた時は父親の何歳当時であったか、ということとをみても必要がある。

長男楠雄氏が木曾へ帰農したのは1922年で、藤村が50歳の時である。作品「嵐」でみた、毎年の暮に年取りに上京した折に背比べをしたのはそれから数年、藤村の50歳代前半である。これに対して、三男蓊助氏は、途中で独立したりするが、いちばん後まで藤村のそばにいた。24歳の時には藤村はすでに60歳である。多少短絡にすぎるかもしれないが、藤村の身長についての息子たち二人の間のくい違いには、父親のそばにいた、最も強く記憶に残る時期のこのような違いが影響しているのではなかろうか。

(4) 藤村の身長は何cmか

ともかくも、こうして表3にみるように、藤村の身長についてデータを得ることができた。あらためて、それでは藤村の身長は何cmだったのか、と問われたら、

藤村の身長は158cmである。いちばん高い頃は159cmあったようである。

という答えが最も当を得たものではないかと考える。

(5) 藤村の自分を「低い」とする意識について

もう一度、当時の身長の全国平均値に目を移してみると、1900年の20歳値は160cmであり、当時の推移傾向からみて、それより10年近く前の藤村の20歳当時はもう少し低かったことが推測される。したがって、藤村の身長は、同年齢の人たちと比べて、平均値並みか、あるいはそれより幾分下回る程度ということになる。それならば、藤村は何故自分の身長を低いと強く意識していたのである

うか、という疑問が起きてくる。

この疑問に対しては、いずれも仮説的な見解にすぎないが、そのひとつは、すでに言及したように、藤村の父親そして長兄の身長が自分よりずっと高かったため、「低い」という意識が離れなかったであろうと推測される。

次には、現在でも身長平均値の「東高西低」（東日本の方が高く、西の方が低い）ということが言われ、身長と地域との関係は見られるが、現在では都会と田舎といった対比での身長差は見られない。すなわち、昔は田舎では子どもの時から力仕事の中で育ち、背は低いがガッチリしたタイプが多く、これに対して都会にはスラリとしたタイプが多いという、長く定着していたイメージが今ではすっかり変わってしまい、身長発育には全国都市化が滲透済みである。しかし、明治の昔は都会と田舎の身長差が大きく、したがって、東京の人たちの身長平均値は全国平均値160cmよりも1cmないし2cm高かったであろう。東京に住んでいた藤村にはそれだけ自分より背の高い人がより多く目についたことであろう。このことも、自分は「低い」という意識に働いたであろう。

さらには、表4¹⁴⁾は、大学生の男子に自分の身長について「高い」から「低い」まで5段階の自己評価をしてもらった結果であるが、これによると、左端の数字が示すように、自分の身長を高い側に評価するもの21%、反対に低い側に評価するもの42%である。全体の平均値が特に低いのならともかく、171.7cmという平均値は申告値の平均値であるにしてもむしろ少し高めであり、こういう平均値をもつ集団において、自分を低い側に評価するもののほうが高い側に評価するものの2倍もいるということは、ここから男子は自分の身長を低く評価する傾向があるということが看取できる。5段

階平均値をみても、まん中の「普通」と評価するものの平均値が173.0cmであり、全体の平均値よ

表4 申告値による男子学生の身長自己評価5段階別の平均値

(1989年調査)

自己評価段階 (人数)		身長平均値
21	⑤ 高い (42人)	180.6
	④ どちらかといえば高い (141)	177.5
37	③ 普通 (329)	173.0
	全体の平均値 (893)	(171.7)
42	② どちらかといえば低い (219)	169.1
	① 低い (162)	164.9

りも1.3cm高い。これも、自分の身長を低く評価する傾向があるということと符合している。この調査は1989年であるが、この、男子は自分の身長を低く評価する傾向があることは、今も昔も同じではないか。藤村の「低い」という自己評価にも、ある程度これがあったのではなかろうか。

以上において、藤村は何故自分の身長を低いと強く意識していたのかということについて、あれこれ推測を試みたわけである。

表3 4氏から聴取した藤村の身長

聴取		
原 一平氏 … 次男晨也氏	(1979.10.16) → 5尺2寸より少し高め	158~159cm
赤田開太氏 … 孫 健一氏	(1980. 7. 6) → 5尺2寸ぐらい	157.5
島崎楠雄氏 (長男)	(1980. 8.19) → 5尺2寸5分	159
島崎蓊助氏 (三男)	(1981. 7.10) → 5尺2寸	157.5

8. まとめにかえて

島崎藤村についてこれまで述べてきたことは、一口で言うと、藤村の作品を通して、藤村の子どもたちを始めとする多くの人たちの身長への藤村の観察から、そこに藤村の強い関心をみてきたこと、藤村は自分の身長について「低い」という意識を強く持っていたこと、しかし、じっさいにはその意識ほどに低くはなくて、「藤村の身長は158cmである。いちばん高い頃は159cmあったようである。」と推定するにいたったこと、などである。

なお、今回は上のように身長に視点をあてたが、藤村の体格ないしは体つき、さらにできれば藤村の「足が太い」¹⁵⁾「足が大きい」¹⁶⁾という意識まで含めた、いわゆる身体意識について、稿を改めて、探してみたい。

注

- 1) 文部省体育局「平成元年度 体力運動能力調査報告書」270～273ページ, 1990.
- 2) 「背くらべの歌」は、これまで小学3年生の教科書でとりあげられてきたが、1985年5月5日付の朝日新聞に「教科書から姿消す」という見出しで、採用されないことになったとある。それは、今は、柱に傷をつけると叱られる、比べる兄弟がいない、ちまきは食べないのでわからない、などの理由からであるとある。
- 3) 「分配」でも末子のモデルは藤村の四女柳子であるが、母親(藤村の妻冬子)は、1910年8月6日に柳子を出産した同じ日に、産後の出血のために死去した。
- 4) 島崎藤村「桜の実の熟する時」のあとに」第12巻243ページ。
- 5) 伊東一夫編「島崎藤村事典」「桜の実の熟する時」の項、158ページ。
- 6) 伊東一夫編「島崎藤村事典」158ページ。
- 7) 藤村の父親は藤村がまだ14歳の時に亡くなっており、しかも木曾と東京と離れていた(小学4年生時の上京以来、6年生の時に一度会っているのみ)ので、父親の大きかったということは、藤村が小さかったときの記憶とここにあるように身近な人たちから聞いていたことによる。
- 8) 杉原四郎氏から1990年11月5日付の葉書をいただいた。その前半部分にこう書かれている。「河上肇の身長について、羽村しづ子さん(河上の長女)にとい合せたところ、正確な数字ではないが、大体170cmと記憶している。夫の羽村二喜男(京大名誉教授)が175cmだが、それよりは少し低かった、とのこと。」
- 9) 原晨也氏を訪れるに当たっては、義弟の故山口晃氏(元当教室員)のお世話になった。
- 10) この写真は、当時明治学院大学の資料室に勤務しておられた秋山繁雄氏に選んでいただいたものである。
- 11) 赤田開太氏の孫健一氏と連絡をとるに当たっては、すべて秋山繁雄氏のお世話になった。
- 12) この母堂(つまり開太氏の息子の嫁)は、「私がここへ嫁に来たころ、藤村が一度父をたずねてきたので覚えていたが、なんでも小柄だった。」と語ってくれた。
- 13) 最も身近な例として、筆者自身の場合は身長を測ってばかり来ているが、50歳を越えて7年の間に1.5cm低くなった。また、筆者の父親は最高身長165cmであったと記憶するが、73歳の時(翌年死去)には159cmであった。「老化と身長下降」をひとつのテーマとしたいと、筆者は考えている。

なお、起床時から就床時までの身長の、いわゆる日内変動は約1.2cm(発育の旺盛な時期では約1.5cm)であり、起床時から就床時へ下降するが、今は、こうした実測値の問題は措いて、意識値(申告値)のレベルで論じている。

14) これは、東京都内に所在地をもつ6大学の男子を対象とし行った「身体意識および健康生活に関する調査」のうちの一項目であり、第36回日本学校保健学会大会(1989年)において「身長・体重にみる学生の身体意識」のテーマのもとに、筆者が口頭発表を行ったものの一部である。

15) 藤村は、東北学院の教師時代(1896年、24歳)に自分の足が太いといって笑われたと書いている。「この娘はまことにひょうきんな人で、ある日わたしが雨にぬれた足を湯殿のそばで洗うのを見つけ、……「島崎さんもいいが、アスが太すぎる」と言って笑い出した。」これは作品「早春」(1936年)にあるが、このほかに作品「足袋」(1912年)にも作品「桜の雫」の中の「笑い」(1933年)にも出ている。

16) 藤村は、自分の足の大きさについても、作品「桜の実の熟する時」(1914年)の中で「この節は十文半の足袋がはまりません。ばかに甲高と来ているんですからねえ。」と「細君」に言わせている。このほかに作品「桜の実」(1913年)にも作品「母」(1911年)にも出ている。